

小頭岳

平成22年6月29日(火)
新合地区振興会
振興会便り
文責:佐々木 元
NO. 12

紫陽花や白よりいでし浅みどり すいは 水芭

紫陽花(あじさい)は梅雨のころ、花が球形に集まって咲く。花の色が白から青紫色、紅紫色と変わるので、俗に七変化ともいう。立原での紫陽花の取り組みはずばらしい。全国的には鎌倉市の明月院は、一名あじさい寺といわれるほど、あじさいの名所。木工所(山本スミ子さん宅)の紫陽花は一株から青紫と紅紫の花が咲き分けているのを毎年話題にしている人がいる。

長寿の秘訣

- ◎健康を考えた料理の工夫。
- ◎読書をしたり、文書を書くのが好き。
- ◎心がおおらかで、相談相手になるなど人を大切にしている。

津口 久子さん(平床)92歳に聞きました。

『道路工夫物語』(5)

～ かまえてまっどとぞ!! ～

昭和37年から仕事場が、新合地区に加えて宮野河内地区も担当する事になった。この頃から単車に乗る。単車は松下自転車屋(現「松下ガソリンスタンド」=通称「自転車屋」)から購入。松下齊さんは「あっとき払いの催促なし」で、しかも一万円前後安くしてもらった思い出があるという。

萱(かや)をねじって鉢巻にして仕事をしていたら土木事務所の職員が見て「大久保にタオルなっと買ってくれんば」と言うことになり、タオルを買った。

この頃屋休みに、お茶が出される事があった。遠慮していると「おりゃあ お茶飲みにけえ!ちゅうときゃ、かまえてまっどとぞ!!」と怒られる時もあった。お茶を出されたところには職員から貰ったタオルをお礼にやったという。話を聞きながら「萱の鉢巻」は、どうも惣八さんの作戦だったように思われた。機転が利く聡明な惣八さんの事である。これくらいの事はしかねない。タコを捕ってる人は海からタコを投げしてくれる。竹の子の頃は竹の子を貰う。いつもパンをくれる人が居たという。「私には文句を言う人はいなかった。私がバカだったからだろう…」と謙遜されるが、潮時になると「たまにはサボって海へ行こう!」と、誘われたが一回も行った事がなかった。という話を聞くと、本当の所は仕事一途でみんなの為に汗水流す姿が周囲の人の感謝と尊敬の気持ちとして表れたのだろう。惣八さんは、多くの人の恩を受けてこれまで充実した仕事が出来たと手を合わせておられた。

次回は「あの惣八さんでも緊張!の場面」を!



さらなる新合の活性化をめざして

自分が暮らす地域をよくしたい。

子どもや孫にもっと住みよい郷土を残しておきたいと思うのは、誰もが抱く願いの一つである。3年前敬老会の終わった後私の耳で「年寄りが30%を超えたということばってん、これから新合はどぎゃんなってじゃろかい。限界集落になっぞ。」とささやいて帰られた方がおられた。おそらく上記の願いから出た言葉だろう。その心配を数値で見ると50年前の昭和35年(河浦町発足当時)の新合の人口は1,851人、世帯数は346戸であった。今年4月の人口は768人、291世帯である。50年前の新合小学校の卒業生は49名いたが、今年度の全児童は42名である。ちなみに昭和38年度の全児童は256名もいた。70歳以上の高齢者は30%を超え、市平と立原は65歳以上が50%以上となった。このように少子高齢化が進み将来に対する心配や不安は高まるばかりである。

県外在住の方に郷土の心と味を!

先般、東京河浦会や関西河浦会(新合会)、本渡新合会等におじゃましたり、話を聞いたりする機会があった。いずれも郷土新合への熱い思いが生きる心の支えとなっていることが強く感じられた。会のなかでも秋祭りや墓参り、同窓会、稲作り・頭岳登山など話題が尽きない。また、新合小学校同窓会会報「頭岳」に記載された会長吉田多計至さんの「むら起こしに知恵を出し合って」を読んだ大阪在住の新合出身の方から「コメがそんなに安く困っているなら新合のコメを買ってもいい。30人余りの仲間がいる。」との便りが届いたという。(コメを送ってやったところ今食べている北陸のコメよりもおいしいという返事があったそうだ。)丁度、まちづくり検討委員会でも「ふるさと便(仮称)」を検討していた時でもあり、住民のアンケートでも新合の農産物を生かした活性化の希望が多く、それにも叶うものであり、その具体的取組をすることにした。当面、新合出身で県外在住の50歳から70歳までの方に新合のコメを買っていただけるかどうかの調査と地元新合でどれくらいコメの提供ができるかを調べその状況を踏まえて先に進めたいと考えている。将来的には新合の新鮮な野菜や果物・加工品等も加えて産直の安心・安全・美味しさとふるさとの便りも添え、物心両面の「ふるさと便」をと考えている。このような取り組みには相当の細部にわたる計画や努力が必要で、振興会の役員のみで出来るものではない。住民の積極的な理解と協力・在外の方々の支援が何よりも望まれる。今こそ脈々と受け継がれてきている新合のよき伝統や町民性を生かし内外とも英知を結集し総力を挙げて取り組み成功させようではありませんか。このような取り組みをする中で当面の目標として、今の新合の人口・世帯を減らさないこと。最終の目標は今の人口と世帯数を増やし活性化を図ることである。将来ある子どもや孫たちのため、また、在外の方々のためにも今まで以上にすばらしい新合を創りあげていきたいものである。

あでやかに舞う

がんばってます⑤

藤間流名取「藤間豊南海さん(本多裕子)」

日本舞踊、藤間流名取藤間豊南海(本多裕子)さんを訪ねた。裕子さんは、40代で藤間流の名取となられ「藤間豊南海」として、天草を中心に多くのお弟子さんに、日本舞踊を教えておられる。小学一年生の時、学芸会(学習発表会)で着物を着せられ踊らされたのが最初で、それ以来学芸会で日本舞踊を毎年踊っていた。そんなことから踊りに興味・関心が湧き、好きになったのではないかとのこと。正式に始めたのは20代からだという。連れ合いの千明先生の転勤や主婦としての仕事の傍ら多忙の中に熊本まで習いに行かれたとのこと。40代の若さで名取になられたのは並大抵の苦労ではなかったろうと思われる。その後師範も勧められたが、これ以上熊本へ出向くのは無理と思いつ断られたと言う。

昭和60年には市ノ瀬の自宅に立派な稽古場も造られ、お弟子さんの稽古に一層力を入れられた。お弟子さんの数を聞くのを忘れたが、全体では相当数の、お弟子さんに教えておられる事が推測された。新合にも永野歌子さんや内田由利子さんなど何人もおられる。

舞踊をして良かった事は踊る事の楽しさに加え行く先々で素晴らしい仲間に出会い、その仲間を通して多くの事を学ばせて貰い人間修業が出来た事だと言う。終始、千明先生は側で温かな顔で奥様との会話を聞いておられたが、奥様の一番の理解者であり協力者である事も実感できた。

最近、田舎の良さや日本の素晴らしい文化や伝統が失われつつあるとよく言われる。しかし、日本舞踊の普及発展に頑張っておられるということは、日本の伝統芸能を受け継ぎ盛んにしていくという活動の一翼を担っておられる事にもなる。そういう素晴らしい舞踊家が新合におられる事を誇りに感じながら自宅を後にした。



～ 報告 ～

○新合地区球技大会(5月9日)

優勝: ゲートボール・市平、ソフトボール・上津留A
グラウンドゴルフ・上津留B、個人・山田アキエさん
ミニバレー・下津留

○地域総合学習の会 開講式・講演会(6月13日)

講師: 上中万五郎先生・65名参加

○河浦町エンジョイミニバレー大会(6月20日)

新合地区より10チーム参加

